ルートヴィヒⅡ世と造庭

岡 崎 文 彬

Ludwig Ⅱ und seine Gartengestaltung

Von Ayaakila OKAZAKI

ここにいうルートヴィヒⅡ世とは19世紀におけるバイエーンの王のことである。

ルートヴィヒⅡ世がつくった諸城のうち、最も華麗な庭をもっているのは、リンダーホーフであるが、この庭園については昭和12年の日本造園学会において発表した¹⁾。そして筆者は現在でも、そのときと異なった見解はもっていない。

ただルートヴィヒⅡ世はリンダーホーフ以外にも庭園をつくっているので、今回はかれの造庭に対する態度を総括的に眺めたいと思うのである。

それにはまずかれの年代記をみなければなるまい。

かれの祖父ルートヴィヒⅠ世(在位1825~1848)は活動的な王であったが、王自身の生活は質素だった。といって文化・芸術の愛護者であった事実は否定すべくもなく、記念建築物を多数つくり、名画の数をあつめて美術館の内容を豊かにし、もってミュンヘンを、おもしろおもしろいヨーロッパの一大芸術都市とした功績は大きい。

その嗣子のマクシミリアンⅡ世(在位1848~1864)は気の小さい、それだけに几帳面な王であったが、1842年にプロイセンの王女マリーと結婚した。この二人を両親として生まれたのが、ルートヴィヒⅡ世とオットーⅠ世である。

ところでルートヴィヒⅡ世に焦点をあわせるため、かれの履歴をトーマの編集から抜萃してみよう²⁾

1845年8月25日

ミュンヘンの王宮ニンフェンブルクに生まれる。

1861年6月16日

初めてヴァークナーのオペラ「ローエングリン」をみる。

1864年3月10日

マクシミリアンⅡ世の死去によってバイエルンの

図1 カスパー・フォン・ツムブシュ作のルートヴィヒⅡ世胸像、王位についた直後の姿を影つたものと思われる。

王位にのぼる。なおこの年5月5日ヴァークナーと初会見。6月10日ミュンヘンの宮廷劇場で「トリスタンとイゾルデ」の初演。

1865年12月10日

ヴァークナーがミュンヘンを去る。

1867年1月22日

マクシミリアン公の王女ゾフィーと婚約。5月31日ヴァルトブルクへ、また7月20日パリへ旅行する。10月10日婚約解消。

図2 ホーエンシュヴァンガウからみたノイシュヴァンシュタイン城の全景、もとシュヴァンシュタイン城のあつた跡に1869~86年にわたつて建立されたものである(筆者写真)

図3 ホーエンシュヴァンガウの庭園、マクシミリアンⅡ世が皇太子の時に古城を復旧して建造したもの。ルートヴィヒⅡ世を伴つてマクシミリアンⅡ世はしばしばここに逗留したといわれる。(筆者写真)

1868年6月21日

ミュンヘンの宮廷劇場で「ニュルンベルクの名歌手」の初演、ノイシュヴァンシュタイン城を計画

1869年9月5日

ノイシュヴァンシュタイン城の起工式、9月22日ミュンヘンの宮廷劇場で「ラインゴルト」の初演
リンダーホーフ城を計画。

1870年6月26日

ミュンヘン宮廷劇場で「ヴァルキューレ」初演。

1872年5月6日

王のための特別出演、5月22日バイロイトのフェスティバル・ホール の起工式

1873年

キムゼーのヘレンインゼルが王の所領となる。

1874年8月20日

パリの旅に出る。リンダーホーフ城の構築が始まる。

1878年5月21日 ヘレンキムゼーの起工式

1879年 リンダーホーフ城完成

1886年6月10日

病あつく、弟オットーⅠ世も兄同様の精神病のため

図4 ハインリヒ・プレーリンク筆、ルートヴィヒ城の正面玄関におけるルートヴィヒⅡ世の華麗な鹵簿城の現状もこの水彩画のとおりである。

図5 上段テラスから主庭園を通してリンダーホーフ城をみる。城だけでなく庭園も築造当時とほとんどかわっていない。
(筆者撮影)

め、ルートヴィヒⅠ世の一子ルートポルトが摂政となる。

6月12日 医師同伴でノイシュヴァンシュタインからベルク城に移されたが、翌13日シュタルンベルク湖に入水自殺、同月19日ミュンヘンの聖ミカエル寺院に埋葬。

これによってみても、ルートヴィヒⅡ世が、どのようにヴァークナーに傾倒していたかが推察されるが、そのほかにとどめを知らぬ建造狂でもあったことがわかる。

祖父の場合は在位中徐々に、しかも公共のものを造り上げ、バイエルン自体の文化を高めることを念願したがルートヴィヒⅡ世の場合は、政務を放棄して王城の新築

を趣味として行なったのである。

周知のように、かれの生まれたニンフェンブルクはヨーロッパでも屈指の大きい居城であり、それにシュライスハイムがある。しかもこの他にもいくつかの城が宮廷の所属となっていたのである。したがって別のものを、別の地に築くにしても、別荘程度の、質素な、野趣にとんだものでよかったはずである。むしろバイエルンは当時プロイセンとともに隆々たる大国ではあったが、それにしてもドイツの一つの州にすぎず、矢つぎばやに巨城を築くことは財政的にもむりであったにちがいないし、それを理解しえなかったところに、すでにルートヴィヒⅡ世の分裂的症狀が読みとれる。

かれの建造した城のうち、ノイシュヴァンシュタイン

図6 リンダーホーフの最南端に建つ円型の神殿、1876年ドルマンの設計になる。なお中央のヴィーナスの大理石像は翌1877年にハウトマンが彫つたものである。(筆者写真)

は最大のものであるが、ここには庭園はない。地形、周辺のすばらしい風致から考えてここに庭園を築かなかったのは当然かも知れない。

ところが、リンダーホーフとヘレンキムゼーにはそれぞれ異なる趣向の庭園が築かれ、それはマクシミリアンⅡ世とともにルートヴィヒⅡ世が起居したことのあるホーエンシュヴァンガウ城の庭園とも異なるものである。

リンダーホーフの論文の際に筆者が述べたように、ここをまずビザンチン風につくることが考えられ（これはとりやめとなったが、城の外にあるキョスクになっている）、ついでヴェルサイユ風につくることが計画されたが、それはヘレンキムゼーに実現することにし、³⁾リンダーホーフはロココ風の小城として、これにふさわしい、ユニークな庭園ができあがったのである。²⁾⁴⁾

ニンフェンブルクとシュライスハイムが純然たるフランス式庭園であるのに、なぜルートヴィヒⅡ世は、それ以外にもヴェルサイユ式のものをつくろうと考えたのか。

今日みるようにヘレンキムゼーの宮殿と庭園はヴェルサイユ風といったものではなく、ヴェルサイユそのものといってもよい。むろん詳細にみれば、ヴェルサイユには遠く及ばないが、完全なコピーであることは一見して分かるのである。

かれがリンダーホーフに完成した庭園は造園史上に光輝を放つものであるが、かれの造形美に対する感覚が正常でなかったことは、かれが住い、またかれの造ったいくつかの城と庭園の比較からも伺い知ることができると思う。

図7 回教のキョスク、ルートヴィヒⅡ世は初めリンダーホーフの他にサラセン様式の城を建てようと考えた。それが途中でヴェルサイユ風の大建築の計画にかわり、さらに三転して現在の小城となつたが初めの意図はわずかにこのキョスクに実現した。(筆者写真)

図8 ヘレンキムゼーの庭園
この写真を一見すれば大
低の人々は、それが、ヴ
エルサイユ宮園のアポロ
ンの噴泉からタビ・ヴェ
ールを望んだところと思
うだろう。それほどヘレ
ンキムゼーの庭園はヴェ
ルサイユに似ている。
(筆者写真)

引用文献

- 1) 岡崎文彬：リンダーホーフの庭園に就て、造園雑誌
第4巻第3号 1937
- 2) Bayerische Verwaltung der Staatlichen Schlösser,
Gärten und Seen : Schloss Linderhof 1962
- 3) Gothein, M. L. : Geschichte der Gartenkunst II
1914
- 4) Direktion der Museen und Kunstsammlungen des
ehen, Kronguts in Bayern : Schloss Linderhof
1930

Zusammenfassung

Die Gartengestaltung von Ludwig II ist in Bezieh-
ung mit seinem Charakter erörtert worden.

Obwohl der Linderhofer Garten an sich künstlerisch
ausgezeichnet ist, kann man schon die abnorme
Geistbeschaffenheit des Königs vermuten daraus,
dass er in kürzer Zeit viele, ganz verschiedenartige
Gärten ohne Rücksicht auf die politischen und
ökonomischen Verhältnisse erbaut hat.

(43.1.18受付)

(6 ページより)

ブライアン・ハケット 高橋新太郎：訳

- ・琵琶湖国定公園の休養需要について 近藤 公夫
- ・公共花壇の計画性について 秋田 浩
- ・造園的価値としてのつつじ類の育成について
吉川 勝好
- ・日本芝の分類学的研究 北村 文雄
Vol. 26 No. 1 (昭38)
- ・建築と造園を結ぶもの 斎藤 英彦
- ・醍醐寺三宝院庭園の構造と作庭手法 中根 金作
- ・中ノ島公園の歴史的考察(その2) 高橋理喜男
- ・土壌構成と日本芝の生育ならびに踏圧による影
響に関する実験的研究 本間 啓・小沢知雄
Vol. 26 No. 2. 3
- ・レクリエーション・インダストリー
—アメリカにおけるレクリエーション開発—
久保 貞
- ・アメリカにおける日本庭園
—国際交流への契機— 戸野 琢磨

・庭園のデザインと施工

—カリフォルニア・ガーデンと日本庭園—

- ・東南アジアの自然と庭園の条件 清水 友雄
- ・インドの自然と生活 小野 一成
- ・自然・風土・人間 加藤 栄一
- パキスタン建設に参画して— 近藤 公夫
Vol. 26 No. 4
- ・欧米の造園教育について 横山 光雄
- ・アジアにおける庭についての管見 小野 一成
- ・大阪市における小公園計画の源流 高橋理喜男
- ・ミスト装置による挿木について 田中 幸男
- ・第2室戸台風による樹木被害調査

若林春美・岡本諒明

Vol. 27 No. 1 (昭39)

- ・自然休養地の休養誘致率について 近藤 公夫
- ・庭園における造形の分析研究 飯島 亮
- ・造園樹木の耐潮性に関する研究 井手 久登

(18ページへつづく)